

# Japanese In NY (ニューヨーク生活)



Photo : New York City

## 《異人たちとの夏》

小学生の頃、毎年夏休みになるとお昼のワイドショー枠で放送されていた恐怖・心霊体験の再現ドラマ『あなたの知らない世界』を観て、背筋が凍るような思いをしたのが懐かしい。最近の恐怖・心霊関連のテレビといえば、嘘と分かるような映像を使い回しで流すような状況もあって、『あなたの知らない世界』の恐怖感を超えるような番組はほとんどない気がする。

海外では、1970年代に公開された『エクソシスト』や『サスペリア』、1980年代に公開された『13日の金曜日』や『死霊のはらわた』をはじめ、ほぼ10年周期でホラー映画が話題となっている気がするが、近年では日本の大ヒットホラー映画『リング』が海外でリメイクされて話題となった。

そもそも日本と欧米では恐怖の質というか、感覚が違うようだが、ホラー映画とは異なる海外作品としては、1990年に公開された映画でニューヨークを舞台にした『ゴースト/ニューヨークの幻』という作品も懐かしい。ニューヨークという街はこれまでの歴史の中で殺人事件も多く、そういう背景を考えると街中にいわくつきの場所、物件など数知れずという状況なのかもしれないが、ニューヨークで生活している間にそのような物騒な話を聞くことはほとんどなかった。

恐怖体験といえば、住んでいたアパートには地下室があり、地下に降りる階段辺りから階下は灯が点いていなく、普段は真っ暗な状態だった。特に用事もなかったため、地下に降りるようなこともなかったが、ある日地下で物音がしたため、真っ暗な階段の上から階下を覗き込んでみた。その瞬間、階下でキラリと光る目と目が合った。「空き巣かもしれない！ 最悪拳銃、少なくともナイフは持っているだろう」と思い、1階の出口から外に出るか、4階にある自分の部屋まで駆け上がるかとの判断を迫られた。だが、次の瞬間「Hey!」という声が出た。緊張の中、恐る恐る再び階下を覗き込むとキラリと光る目の正体は、アパートのオーナーで初老の白人のサムだった...。「電気くらいつけておいてよ!」と思ったのは言うまでもない。

また、働いていたレストランでも恐怖体験をした。地下の倉庫に氷を作る大きな製氷機があり、ある日バー用の氷を補充しようと大きなバケツを1つずつ両手に持って地下に降りた。夕方だったので電気を付けなくても地下までは降りることができたが、製氷機がある薄暗い倉庫の奥で物音がした。気付かれないように倉庫の外の柵から中を覗き込むとキラリと光る目と目が合った。「ドロボウかもしれない！ 最悪拳銃、少なくともナイフは持っているだろう」思い、店の仲間を呼びに階段を上がろうと思った瞬間、「Hey!」という声が出た。緊張の中、恐る恐る倉庫の中を覗き込むとキラリと光る目の正体は、店のキッチンで働いているスパニッシュのカルロスだった...。「電気くらいつけておいてよ!」と思ったのは言うまでもない。

もう一つ、忘れもしない恐怖体験がある。肺気胸という症状でマンハッタンの病院で入院、手術を受けたことがあった。手術後に麻酔が切れて目がさめると、パンツを履いていないことに気づき、何故か右手にはかなり大きめのクランベリージュースの缶を抱えていた。一瞬何が起こったのかわからなかったが、目の前で黒人のおばさん看護婦が微笑んでいた。そのおばさんに向けた言葉は「Where is my underwear? (僕の着下はどこ?)」であることは言うまでもない。

結局、ニューヨークで生活している間に命に関わるような恐怖体験はなかったようだ。アルト・サックスを奏でるチャーリー・パーカーの亡霊にでも出会っていれば最高だったのだが。